

幕末の動乱と品川御台場

対外危機の深化とペリー来航

18 世紀末頃から、日本近海に外国船が多く渡来するようになりました。危機感を強めた江戸幕府は、全国規模で沿岸の警備を強化しますが、外国船の数はますます増え、各地で事件が多発するようになりました。なかでも、嘉永 6 年(1853) 6 月のアメリカ・ペリー艦隊の来航は、将軍のお膝元である江戸湾で起きたもので、江戸幕府を揺るがす大事件となりました。

品川御台場の築造

江戸幕府は、江戸湾の防備を強化するため、品川沖からふかがわすざき深川洲崎（現在の東京都江東区）にかけての海上に 11 基の台場を造ることにしました。そこで、伊豆国いずのくに韮山にらやま（現在の静岡県伊豆の国市）の代官である江川太郎左衛門英龍えがわたろうざえもんひでたつが、ヨーロッパの書物をもとに台場造りの指導にあたりました。しかし、財政難などの理由から、完成したのは第一から第三、第五・第六台場と、後に加えられた陸続きの御殿山下台場の 6 基にとどまりました。

御殿山の外国公使館

安政 5 年（1858）にアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスの 5 ヶ国と条約を締結したことで、外国公使の江戸駐在が決定し、公使館が設置されました。このことは、外国人を排斥する考えをもち、主従関係を離れて活動する武士たちによる外国人襲撃事件を招きました。文久元年（1861）には御殿山に公使館建設が計画され、まずイギリス公使館が建てられましたが、翌年 12 月 12 日、品川宿にある旅籠屋はたごやの土蔵相模どぞうさがみに集合した長州藩ちようしゅう（現在の山口県萩市周辺）の武士によって燃やされてしまいました。

英国軍艦の品川来航と防備計画

文久 2 年（1862）8 月、薩摩藩さつま（主に現在の鹿児島県）の武士によるイギリス人殺傷事件「生麦事件なまむぎ」が発生しました。翌年 5 月には、事件の賠償金問題を巡りイギリス軍艦が品川沖に来航しました。幕府は、品川第四・第七台場の築造再開と、越中島えっちゆうじま（現在の東京都江東区）から大井村までの一連の海岸に台場を築く防備計画を実行に移します。しかし、人件費と石材価格の高騰、長州戦争*などの影響により、完成には至りませんでした。

※長州戦争：江戸幕府と長州藩（現在の山口県萩市周辺）との戦争。

幕末の打ちこわしと品川宿

打ちこわしは、米の価格が高くなって生活に苦しむ民衆による暴動のことで、江戸時代を通じて幾度か行われました。慶応2年（1866）5月28日に起きた打ちこわしは、品川宿から始まりました。翌日には江戸市中に広まり、8日間で米屋、質屋、酒屋など226軒が襲われたといわれています。

1_07_01



品川第五台場^{どるい}土墨の断面標本

嘉永7年～安政元年（1854）

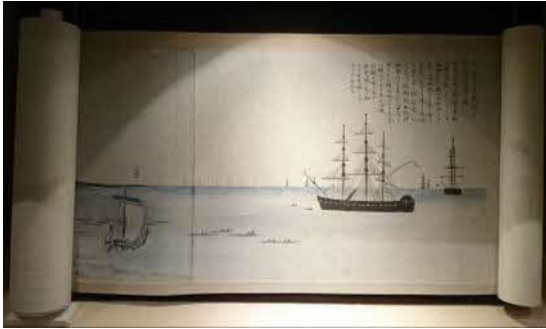
昭和20年代後半～30年代後半（1950～1960年代）

平成26年（2014）品川台場（第五）遺跡（東京都港区港南）出土

東京都埋蔵文化財センター調査・提供

白い点線より上は、近代以降の埋め立ての際にかぶせられた土です。白い点線より下は、台場を築造した当初の土墨です。土墨を強固にするため、土を突き固める作業を繰り返した結果、地層のような縞模様が形成されました。

1_07_02



同神奈川ヨリ異船ノ退帆ヲ観ル図（複製）

江戸時代 19世紀半ばごろ作成か
原資料：神戸市立博物館所蔵（「幕末風俗図巻」のうち）

嘉永7年（1854）3月、「日米和親条約」の締結を果たしたアメリカのペリー艦隊が、横浜から帰っていく様子を描いたものです。ペリーは前年の嘉永6年6月に来航し、第13代大統領フィルモアの国書を江戸幕府に手渡していましたが、その返事を得るために再び来航しました。江戸湾の防備のために品川沖へ台場を築造している最中の出来事でした。

1_07_03



ちぐい/じぐい
地杭

嘉永6～7年（1853～1854）
平成11年（1999）品川台場（第一）遺跡（東京都港区港南）出土
第一台場石垣の直下に設置された杉でできた杭（地杭）の頭部と先端部を裁断したものです。頭部に墨で「三間半」（約6.3m）と書かれており、伐り出した時の長さがわかります。

<p>1_07_04</p> 	<p>ちぐいじぐい 地杭</p> <p>嘉永 6～7 年（1853～1854） 平成 11 年（1999）品川台場（第一）遺跡（東京都港区港南）出土 海底に打ち込まれた杭（地杭）を引き抜いた後、輪切りにしたものです。</p>
<p>1_07_05</p> 	<p>どたんがん 土丹岩</p> <p>嘉永 7 年（1854） 平成 24 年（2012）品川台場（第五）遺跡（東京都港区港南）出土 台場の埋め立てには、粘土質の土丹岩（砂質泥岩・シルト岩）を使用しました。台場の基礎の真下とその外側で出土しており、海水の浸水防止の役割を担ったと考えられています。</p>
<p>1_07_06</p> 	<p>やあな 矢穴付きの石材</p> <p>嘉永 7 年（1854） 平成 24 年（2012）品川台場（第五）遺跡（東京都港区港南）出土 伊豆半島産の安山岩であり、岩石を割る際に器具を打ち込むための、一列に並んだ長方形の穴（矢穴）の痕跡が残っています。石垣に使われなかった石材は、台場本体周辺に投棄されました。これを「捨石」と呼んでいます。</p>

<p>1_07_07</p> 	<p>品川御殿山・^{まつだいらするがのみしもやしき}松平駿河守下屋敷ヨリ御台場ノ土ヲ^{になうのず}荷図（複製）</p> <p>江戸時代 19世紀半ばごろ作成か 原資料：神戸市立博物館所蔵（「幕末風俗図巻」のうち）</p> <p>品川台場築造で使用する土は、御殿山、^{ごてんやま}八ッ山、^{やっやま たかなわせんがくじ}高輪泉岳寺などの山を切り崩し、目の前の海岸から船で運びました。土を運ぶ人足は5,000人、船数は2,000隻におよぶ日もありました。今治藩（現在の愛媛県今治市周辺）の松平駿河守の屋敷は八ッ山下にあり、台場ができてからは、第一台場警備担当の^{いまぼり}川越藩（現在の埼玉県川越市周辺）松平家が駐屯しました。右手奥に見える家並みは品川宿です。</p>
<p>1_07_08</p> 	<p>品川砲台大砲試発図（複製）</p> <p>19世紀半ばごろ作成か 原資料：公益財団法人江川文庫所蔵 国指定重要文化財</p> <p>完成した6つの台場で大砲を試射する様子を描いたものです。手前に御殿山と品川宿の家並と御殿山下台場が、奥に第一・二・三・五・六番の台場を確認することができます。諸藩が警備する6台場の合同演習は、安政2年(1855)2月以降たびたび行われました。</p>

1_07_09



御殿山公使館地図（複製）

文久2年（1862）作成か

原資料：東京大学史料編纂所所蔵

文久元年（1861）、御殿山に建設が決まった、アメリカ・オランダ・イギリス・フランスの4ヶ国の公使館の予定地と、その周辺状況を記した平面図です。中央に品川御台場の築造の際に土を掘りだした場所の跡があり、それを囲む様に各国公使館の建設予定地が描かれています。江戸幕府は、安政5年（1858）の条約締結以降、各地で外国人殺傷事件が多発したことを受け、御殿山に各国公使館を移設して警備を強化することにしました。しかし、最初に建てられたイギリス公使館は、完成直前の文久2年（1862）12月12日、高杉晋作^{たかすぎしんさく}ら13名の長州藩^{ちやうしゅう}（現在の山口県萩市周辺）の武士によって燃やされました。これ以後、御殿山に外国公使館が建設されることはありませんでした。